

業績にかげり？京都の製造業

2月3日の京都新聞によると、京都府内の大手製造業の第3四半期の業績発表で下方修正が続いている。ご存じ日本電産が大幅な減益の発表を行い、その分析を掲載したダイヤモンド社を相手取って訴訟を起こした。車載事業の不振が原因だが、その伏線としてここ10年間の永守マネジメントの失政があると書いた。激怒した永守氏が事実無根とクレームをつけたのだが、記事を読むと当たらずとも遠からじ。特に、この10年に及ぶ後



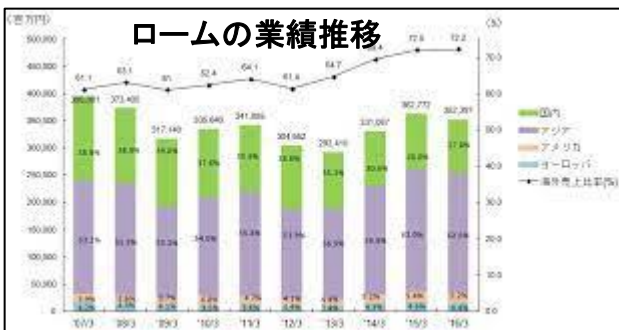
継者選びの失敗のツケは大きい。村田製作所、京セラなども軒並みこの第3四半期の業績は振るわず、減収、減益を強いられた。想定した利益を大幅に下方修正し、日本電産は大きく株価を下げた。



<解説>各社の修正理由はまちまちだが、京セラは原料価格の高騰と物流コストの値上がりという原価部分の影響が大きい。末端製品価格の値上げ交渉が長引き、価格転嫁が進まなかった。価格転嫁の交渉よりはるか前にコストアップの影響が押し寄せた。スマホ市場の低迷も原因のひとつ。大市場の中国市場の伸びが止まり、在庫が積みあがって今までの稼ぎ頭の電子部品市場にも減速感がある。スマホ市場はずっと好調を維持してきたが、中国市場での5G対応の新商品の普及が一服し、買い替えインターバルが延びて、市場の回復が緩やかになった。為替も円高に振れ、従来の輸出で稼いでいた企業の業績にマイナスの影響を及ぼしている。反対にロームはパワー半導体の

需要が旺盛で、予想を上方修正した。今まで、総じてどの企業も好調な業績を堅持していたが、これからはまだら模様になり、各社独自の要因での業績の変動がありそうだ。特に、車載事業の浮沈が大きく業績を直撃しそうだ。日本電産のように、車載事業の浮沈が全社業績に大きな影響を与える。自動車メーカーが独自に製品開発に乗り出しているという事情もあり、今後の動向に注目が集まる。以前に

業績概況	2021年度		2022年度		2021/21Q1		22Q3/21Q4	
	第1四半期	第4四半期	第1四半期	第4四半期	(%)	(%)	(%)	(%)
売上高	4,395	100.0	4,331	100.0	4,267	100.0	▲29	▲0.7
営業利益	1,051	23.9	890	20.3	886	20.3	▲165	▲15.7
両社前年同期比	1,037	23.6	898	20.7	1,012	23.2	▲25	▲2.4
母体以上に増収する 営業利益	772	17.6	637	14.7	752	17.2	▲20	▲2.6
換算 (円/USD)	109.40		116.21		120.57			



比較して業績のアップダウンのインターバルが短くなった。以前の半導体市場のように、短期間にジェットコースターのような浮沈を繰り返すと、今後の設備投資動向にもマイナスの影響が懸念される。京都は大手電子部品メーカーの下に、多くの中小零細企業がぶらさがっている。トップの大手の業績のかげりは、必ずすぐに中小零細企業の業績の悪化に反映される。今までの好調な業が今後果たしてどうなるか、注目だ。